

現地理解と国際理解教育の実践

— ドイツ国際平和村にふれて —

前アムステルダム日本人学校 教諭

愛知県知立市立知立西小学校 教諭 近 藤 崇

キーワード：平和の基礎，国際理解教育，ドイツ国際平和村，平和教育，生きる力

1. はじめに

自分が「日本の外」に出るようになって、世界の平和についてより考えるようになった。日本では、あたりまえに保障されていることが、そうでない国もたくさんある。21世紀の今でも、紛争や貧困により、心理的、物理的に平和な状態にない国や地域が世界には数え切れないほどある。自分が生まれ育った国の外で生活をする、自分が生まれ育ってきた国の状況と比較することができるようになる。

ここでは、日本とのつながりが深い「ドイツ国際平和村」（ドイツはオランダの隣国）の活動を通して、「世界平和」と「国際理解教育」について考えてみたい。

2. ドイツ国際平和村について

(1) ドイツ国際平和村の成り立ちとこれまで

1967年に設立された人道援助団体、ドイツ国際平和村。ドイツのオーバーハウゼン市で活動のスタートがきられて以来、ドイツ国際平和村は、紛争で被害を受けた地域や危機的状況にある地域の子どもたちを助けてきた。今日もそこに本部を置いている。ドイツ国内の他の都市には、平和村の支援組織がある。人々の寄付により運営されている。

(2) ドイツ国際平和村における活動の内容と実態、最近の動向

(一般公開日に行われた日本人を対象にした活動説明会、ドイツ国際平和村事務局職員の中岡麻記さん、ボランティアの高村このみさんからの聞き取りを中心に)

《ドイツ国際平和村の3つの活動》

① 母国で治療を受けることができない重傷や重病の子どもたちの治療をヨーロッパで行う。

母国では治療を受けることができない子どもたちをヨーロッパで治療し、治療後は、母国へ返すという活動を行っている。子どもたちの治療は、多くの協力病院が無償で行っている。子どもたちは、治療を受けた後、ドイツ北西部、オーバーハウゼン市にある平和村の施設にやってきて、午前中はリハビリをし、午後は必要な読み書き、裁縫・料理、工作など、母国へ帰ってから必要なことについての学びの時間が中心となる。ドイツでの滞在は、6か月間から2年間くらいということが多い。



ダンスをして楽しむアンゴラの子どもたち

Q. 平和村に来て、支援を受けられる4つの条件は？（2～12歳という原則の上で）

- ① 母国では、その子どもに必要な治療ができないこと
- ② ヨーロッパでの治療で治る見込みがあること
(脳性マヒ、マラリアは治療によって治る見込みがなく、あえて家族と引き離す必要がないので、ドイツに連れて来ない)
- ③ 治療後、子どもたちの帰国が家族や政府によって保証されていること
- ④ 家庭が困窮していること

Q. 受け入れている子どもたちの数は？

267人（2010年9月現在）（うち160人前後が施設で生活をしている）

Q. 受け入れている子どもたちの母国は？（2010年7月現在）

アンゴラ、アフガニスタン、タジキスタン、ウズベキスタン、グルジア、アルメニア、リベア、モザンビークの8か国

Q. 今、多い病気、外傷の理由（子どもたちの渡独理由）と最近の動向は？

骨髄炎症、火傷、地雷によるけが、先天的な内科疾患、重度の口唇口蓋裂、難病など。

近年は、外傷のある子よりも、骨髄炎症など外から見ただけでは、症状の押し量りにくい病気を罹患している子や、戦争による化学物質などから突然変異が体内で起きている子が運び込まれてくる割合が、これまでに比べて高まってきているという。



その子にあわせた義足を

② 現地の医療状況向上を目指したプロジェクト活動を行う。

ドイツ国際平和村は、紛争被害地域や危機に瀕した地域での医療ケアの向上を目指し、援助活動を行っている。

具体的には平和村施設や基礎健康センター、診療センター、義足作業場などを建設し、資金面などの支援を行い、最終的には、現地の平和村パートナー団体に管理・責任を任せることを目指している。現地パートナー団体には、コンテナやトラックで定期的に援助物資、医薬品、日用品を送っている。これは現地の人々が自分たちで立ち上がることを援助する活動である。現地に戻った子が、現地で苦しんでいる子をパートナー団体に連れてくるという良い連鎖が起きている（ベトナムは、現地プロジェクトがしっかりしたため、現在は、ドイツに子どもたちを連れてきていない）。

③ 平和への関心を高めるための平和教育活動を行う。

「私たちは傷を手当てするだけで戦争に対して抵抗しているとは思わない。そして、またそれが世界平和を永久に手に入れる手段であるとも思っていない。平和は向こうからやってきてくれないのだ。」

（平和村関係者によるメッセージ）

1986年、ドイツ国際平和村の平和教育活動は、ドイツ政府によって正式に認可された。毎年、様々なグループが平和村を訪れ、セミナーに参加している。平和村の活動や子どもたちの母国について知ってもらうことで、平和への意識を高めることを目指している。

Q. 平和教育活動は具体的にどのように行われているのか？

ドイツ国際平和村では、14、15、16歳の子どもたちに平和教育セミナーを平和村施設内のセミナーハウスで行っている。ドイツでは、19～25歳の間に兵役を9か月間行うことが義務化されているが、良心による兵役の拒否（良心的兵役拒否）をして、福祉業務に13か月間携わることで兵役を果たしたものとみなされている（代替役務）。

平和村にもこのようにして、スタッフとなっている人が見られる。ちなみに、ドイツで兵役に就く割合は、近年20%前半に落ち込んでいたが、2010年12月にこの徴兵制度廃止が閣議で決定され、2011年6月をもって、長年ドイツで行われてきた徴兵制に幕が降ろされた（オランダでは、十数年前に徴兵制度は廃止されている）。

Q. 平和村へと続く道“Rua Hiroshima”の名前の由来は？

平和村へと続く道 Rua Hiroshima（広島通り）の入り口には、活動支援のための物資を入れる青いコンテナが置かれており、いつでも自由に物資を入れることができる。ドイツの街中の様々な場所でもこのコンテナが見られる。それほど、市民の生活と平和村が密着していることが伺える。

Rua Hiroshimaという通り名の“Hiroshima”は、2度と戦争が起きないようにという願いを、“Rua”は、当時、たくさんのアンゴラから来た子たちが平和村で暮らしていたので、平和村代表ということで、彼らが使うポルトガル語の“Rua（通り）”で通り名の登録申請をすることとなった。平和村で生活したり、その活動に携わっ

たりしている人たちの心を、一般ドイツ市民や国外から訪れる人たちへ発信しているのだと考えられる。

《その他》

Q. スタッフの人数は？ (2010年8月)

約150名 (子どもたちのリハビリのための生活を送る施設と本部事務所を合わせて)

常勤日本人スタッフの方は、2名。平和村で住み込みボランティア・研修生として支援活動をされている方が約20名。(うち、10名の方が日本人。)

Q. スタッフの方の活動に携わることになった経緯は？

〔事務局職員の中岡さんの場合〕(11年目)「何もしていないのに、傷ついている子がいるのはおかしい」という思いから。

〔事務局職員の宍倉さんの場合〕(8年目)「ここだったら、自分にしかできないことがある」という思いから。

〔ボランティアの高村さんの場合〕(2009年4月～2010年3月の一年間)「子どもの時にテレビで観た平和村の子どもたちが心にずっと残っていた。自分も歩くことが難しいという時期があった。そんな自分には、伝えられることがあるのではないか」という思いから。

Q. 子どもたちの実態は？ メッセージは？

〔事務局職員の中岡さん〕自身がこれまでの活動から感じてこられたこととして、「病气やけがとともに生きながら、子どもたちが、『生きる力にあふれている』こと。そして、子どもたち同士、けんかをする時も、もちろんあるけれど、相手を思いやる子どもたちの行動を見た時に、この『思いやり』『隣人を大切にする』ということが、世界を平和へ導く上で、重要な基本であると改めて認識する。生きていくために、ドイツに来なければならなかった子どもたちだけけれど、子どもたち一人ひとりが、『平和への希望』であること」を挙げられた。

〔ボランティアスタッフの高村さん〕「耐えてきたからこそ、他の人の苦しさや痛みを自然と分かる」子どもたち。

〔アンゴラ現地パートナー団体の医師〕「壊すのは一瞬、直す(治す)のには、何十年もかかる。」

この言葉は、私の心に深く残った。これは、地球環境や人との信頼関係においても同じことが言えるなあということも…。

3. 日本人学校の子どもたちとともに

ドイツ国際平和村の方との出会いから2010年3月、7月、9月と3度にわたり、平和村の現地を訪問させていただく機会を得た。3度とも平和村のお祭りであり、一般公開日である。7月は、“Peace Im pott [ポットで平和(みんなであつになろう)]”。9月は、“Dorffest (村のお祭り)”。その際には、セカンドハンドショップや食べ物屋台というお店や盆踊り、子どもサーカスやダンス、隣のデュッセルドルフ市の和太鼓グループによるパフォーマンスや同市の合唱団による演奏会もあった。和太鼓グループも合唱団どちらもそのメンバーの大半は、日本人であった。日本人・日本人社会の平和村との結びつきの深さを伺うことができた。

今回訪問させていただいた3度とも、自分の担当学年小学部3年生の子どもたちと保護者の方々にご理解とご協力を得て、たくさんの生活支援物資の寄付をすることができた。感謝。そして、家庭で平和村をきっかけに自分の置かれている環境がいかに有り難いものであるのかを、親子での対話がなされたことにも感謝。

また、子どもたちと一緒に平和村からお借りしたVTR(2005年の愛・地球博で上映されていた日本人子ども特派員が平和村の子どもたちと交流したもの)を見た。そのVTRや学級での話し合いを通して、以下のような感想が出てきた。

・せんそうというものは、二度とやってはいけないこと。せんそうは、「生きる」ということをわすれた人がほとんど。

- ・やられたけど、またこっちだって手を出したら、自分たちと同じうんめいになることを考えたら、せんそうをしなくなると思う。だれがなんのためにせんそうをするのか。きっかけをつくった人は、どんな気持ちでいるのか知りたい。
- ・さいごに「せんそうは大人から始まります。そして、子どもがひがいにあいます。」ということにじーンとききました。「たしかに」と思いました。「〇〇になってるのは、ありえないよね」と思っていましたが、その〇〇があの子どもたちには、ふつうということを知ってかわいそうでした。わたしたちは、「あの子どもたちみたいになっていない」ということだけで、しあわせということを学びました。

4. ドイツ国際平和村のめざすところ

平和村の前代表が生前、口にしていた団体のめざすべきところは、「平和村そのものがなくなること」そのような世界を創り出すこと。平和村は、治療のみを目的としているのではなく、治療を必要とする子がドイツへ来る必要性がなくなるように、現地の医療向上や異民族間の関係を良好にしようと活動をしている。さらに、平和教育も行っている。治療→現地の医療、情勢向上→平和教育・普及という三段階を常に同時進行している。すばらしい活動である。

ドイツへ連れて来られる子どもたちがいなくなるようにするための活動。「夢」ではなく、近いうちに達成する「予定」となるよう、一人ひとりの「思い」だけでなく「実行」が必要である。

5. まとめ

一般市民レベルで平和の基礎をつくる。ドイツ国際平和村がそうしているように、平和が向こうからやってくるのを待つのではなく、自分たちから平和を創り出せるよう、主体的な働きかけが必要である。そのための一つとして、平和教育が重要であるだろうし、地域レベルでの人と人とのつながりを大切にすべきだと思う。今回、自分の目を通して、学んだこと、感じたことを日本でしっかりと子どもたちへ伝えていきたい。その役割が自分にはあると感じている。

このレポートでふれたこと以外に、日蘭交流イベントにも何度か参加させていただく機会を得た。現地オランダの方たちが、毛筆で自分の名前を書くことのサポートをしたり、オランダ人の名前に漢字を当てて、毛筆で書き、その見た目と意味を楽しんでいただいたりした。このように、一般市民レベルで平和の礎となるアクションはたくさんある。平和、そのもっと手前にあるのが、お互いの文化を伝え合うこと、お互いを知り合うこと。これからも、積極的に異文化理解、相互理解につながるようなアクションをしていきたい。その小さな積み重ねが、やがて平和の“輪”を広げていくことにつながると信じている。

これらの気づきができたことは、とても有り難いことである。この気づきに際し、関わってくださったすべての方、そして、私のオランダでの生活を支えてくださったすべての方、すべてのことに感謝せずにはいられない。